

研究報告

三重大大学の学生海外語学研修プログラムの現状と展望：

第2回タスマニア大学語学研修結果に基づいて

花 見 楨 子

The Perspectives of Language Study Programs in Overseas for Mie University Students: The Effects of the 2nd Language Study Tour in University of Tasmania

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

In February and March 2000, thirty-four undergraduate students participated in the language study tour in University of Tasmania. Their expectations and evaluations on the program were expressed in the pre-departure questionnaire survey and another survey was administered after the tour was completed. This report discusses the results of the surveys and future development of the programs.

The pre-departure survey shows that overwhelming majority of the participants are not confident about their ability in English, thus are primarily motivated to improve their practical communicative skills. Further, they expect a wide range of cross-cultural experience including learning local cultures and making friends.

After the study tour, the majority of them expressed their satisfaction with the program and intention to recommend the program to their friends. Nevertheless, the language classes consisting solely with Japanese students became the source of their complaints. They prefer to study the language with a group of students from different origins so that the English language becomes the real *lingua franca* of the class. The participants found their homestay experience most enjoyable and fruitful. They developed local relationships primarily through homestay families.

It was revealed that University of Tasmania offers a desirable study environment for inexperienced students. The program should continue relying on the thoroughly professional and dedicated staff members of UTAS. Further, more diversified overseas study programs should be developed in order to respond the needs of the students.

キーワード：海外語学研修、英語力の向上、異文化体験、コミュニケーション、
ホームステイ

1. 三重大大学における学生海外語学研修プログラム

本学ではこれまで、ミシガン州立大学における夏期英語研修、ドイツのエアランゲン大

学におけるドイツ語研修等、いずれも大学間学生交流協定を締結している大学での語学研修を実施してきた。ミシガン州立大学での夏期英語研修が、学生交流協定が一時的に破棄される中で中止となり、代わりにオーストラリアのタスマニア大学での研修が2000年の春休みに開始された。2001年には、2月22日から3月24日までの4週間に渡って第2回のタスマニア大学ホバート・キャンパスでの英語研修が実施され、工学部を除く4学部から34名の学生が参加した。(参加学生の学部別内訳は、人文学部12名、教育学部7名、医学部2名、生物資源学部9名で、この内、学部2年生が3名、残りは全員1年生である。)以下、まず参加学生たちの研修前後のアンケート集計結果に基づいて、プログラムの評価を行い、三重大学生のための海外語学研修プログラムのさらなる開発と留学生センターの役割について述べたい。

2. 研修前アンケート集計結果

34名の学生に参加動機を複数回答で聞いてみると(表1)、「英語を学びたい」と答えた者が参加者の71%を占め、さらに「異なる文化を経験してみたい」「外国で生活したい」といった異文化体験志向が44%、「ホームステイをしてみたい」が回答者の27%を占める。

英語研修プログラムへの参加であるから、英語の上達を志向する回答が最多であることは当然と言えるが、それ moreover 基本的な英語運用能力を身につけることを期待する者がほとんどである。表2に見られるとおり、参加者のうち、自分の英語力にいくらかでも自信のある者は20%にとどまり、その他は「ほとんど自信がない」のである。研修参加によって具体的にどのような能力を獲得したいかについては、回答者の65%が総合的な「会話

表1 語学研修プログラムへの参加動機(複数回答)

回答内容	回答数	回答比率(%)	回答人数比率(%)
英語を学びたい	24	38.1	70.9
ホームステイをしてみたい	9	14.3	26.5
異なる文化を経験してみたい	10	15.9	29.4
外国で生活してみたい	5	7.9	14.7
友達に誘われて	2	3.1	5.9
大学のプログラムから安心	3	4.8	8.8
その他	10	15.9	29.4
合 計	63	100.0	185.6

力」をあげている。(表3)

英会話の上達以外の、研修期間における獲得目標としては、「友達を作り、現地の人と交流する」をあげた者が全体の24%、その他に、「異なる文化や価値観の体験」と「積極性や行動力をつける」がそれぞれ18%、「現地の文化を知る」が12%である。(表4)

以上をまとめると、これらの学生たちは、タスマニア語学研修への参加を通して、ほとんど自信のない自分の英語力を高めることを第一に、異なる文化での生活を体験し、現地の文化について学び、友達を作る、さらにこうした体験を通して、積極性や行動力を身につけることを期待している、と言えよう。

表2 自己の英語力評価

回答内容	回答数	回答人数比率 (%)
日常会話は出来る	1	2.9
簡単なことなら何とか意志疎通できる	6	17.6
ほとんど自信がない(会話力)	9	26.4
ほとんど自信がない(表現力)	7	20.7
ほとんど自信がない(聞き取る力)	5	14.7
ほとんど自信がない(語彙)	2	5.9
ほとんど自信がない(その他)	4	11.8
合 計	34	100.0

表3 語学研修での獲得目標(英語に関して)(複数回答)

回答内容	回答数	回答比率 (%)	回答人数比率 (%)
会話力をつける	22	51.1	64.7
自己表現力をつける	5	11.6	14.7
聴解力をつける	3	7.0	8.8
発音を改善する	2	4.7	5.9
自信をつける・積極性を養う	3	7.0	8.8
映画を字幕なしで楽しめるようになる	2	4.7	5.9
その他	5	11.6	14.7
特になし	1	2.3	2.9
合 計	43	100.0	126.4

語学研修への期待が単に語学力の向上にとどまらず、文化的人的交流への期待を伴っているわけであるが、それはとりもなおさずホームスティへの期待感や不安感となって現れている。(表5) 全回答数40のうち、期待感が13例(回答者の38%)、不安感が23例(同じく68%)である。言葉も行動規範も異なるであろう人達と共に生活する可能性は、これまで外国人との親密な交流経験を十分に持っていなければ、当然にも相当の不安を伴

表4 語学研修での獲得目標(その他)(複数回答)

回答内容	回答数	回答比率(%)	回答人数比率(%)
友達を作る・現地の人たちと交流する	8	21.1	23.5
異なった文化や価値観を体験する	6	15.8	17.6
タスマニアの自然を楽しむ	3	7.9	8.8
現地の文化を知る	4	10.4	11.8
積極性や行動力をつける	6	15.8	17.6
日本について紹介する	2	5.3	5.9
その他	3	7.9	8.8
特になし	6	15.8	17.6
合 計	38	100.0	111.6

表5 ホームスティへの期待や不安(複数回答)

回答内容	回答数	回答比率(%)	回答人数比率(%)
期待(ホストファミリーと仲良くなりたい)	5	12.5	14.7
期待(一緒にいろいろな所へ遊びに行きたい)	3	7.5	8.8
期待(食生活への関心・期待)	3	7.5	8.8
期待(文化の違いを学び教え合う)	1	2.5	2.9
期待(その他)	1	2.5	2.9
不安(コミュニケーション)	5	12.5	14.7
不安(人間関係)	8	20.0	23.5
不安(生活習慣や文化への適応)	6	15.0	17.6
不安(その他)	4	10.0	11.8
特になし	4	10.0	11.8
合 計	40	100.0	117.5

うものであろう。表 6 に見られるとおり、外国人と親しくなった経験のない者が 13 人 (38%) を占めている。経験があると答えた者のうち 11 人は三重大の留学生との交友関係をあげており、これが最多を占めている。他に 4 人が高校時代の外国人英語指導員をあげており、教育機関における外国人との接触機会が果たす役割の大きさを感じさせる。

最後に、自己の性格について、知らない人と話す、友達を作る、自分について話す、異なる文化や習慣について興味を持ち体験するといったことが積極的にできる方かどうかをたずねた。「英語はできないけれど、友達作りには自信があるから大丈夫」と明るく考えられる者が 15 人 (44%) を占め、自分を「内向的、消極的」と考えて自信のなさを表明する者は 8 人 (24%) と少ない方であった。性格の内向性を気にしている者の多くは、語学研修を「自分に自信をつける、積極性を養う」機会と捉え、自己の飛躍を目指しているのである。(表 7)

3. 研修後アンケート集計結果

では、事前アンケートに見られたような期待と不安をもって研修に臨んだ学生たちが、研修後、その経験をどのように評価しているかを見てみよう。(研修後アンケートには、最終的に 32 名が回答した。)

表 6 外国人との交流経験

回答内容	回答数	回答比率 (%)
な し	13	38.2
あ る (三重大大学の留学生)	11	32.4
あ る (英会話の先生・高校の ALT)	4	11.8
あ る (海外でのホームステイ家族)	1	2.9
あ る (その他)	5	14.7
合 計	34	100.0

表 7 自分の性格 (異文化体験への積極性)

回答内容	回答数	回答比率 (%)
外向的、積極的	15	44.1
内向的、消極的	8	23.5
中 間、曖 昧	11	32.4
合 計	34	100.0

まず、80%以上の学生が、この語学研修に参加してよかったとの肯定的評価をし、研修の目標に対する何らかの達成感をもっていることがわかった。(表8、表9) ただし、肝心の英語力の向上については、「上達した」とはっきり言い切る者は5名にとどまり、19名は、「ある程度上達した」「部分的に上達した」との限定付き達成感なのである。(表10)

英語研修への評価を詳しく見てみよう。(表11) 全回答数42のうち、肯定的内容15より「問題があった」とする回答25の方が多い。回答人数比でみると、47%、つまり半数近くが肯定的評価をしているものの、同時に78%が問題も感じていたのである。肯定的評価の内容としては、「実用性」(すぐに使える、役立つ英語)と「楽しく学ぶ」(ゲームや実習的要素を取り入れた学習法の工夫に対する評価)の2点に集中している。

「問題があった」との回答のうち、最も多かった内容は、教室内での「日本語の使用」に関することである。彼らの多くは、初めて英語圏で英語を学ぶことについて、これまで

表8 研修プログラム終了後の評価

回答内容	回答数	回答比率 (%)
肯定的評価	27	84.4
その他	5	15.6
合 計	32	100.0

表9 目標の達成感

回答内容	回答数	回答比率 (%)
達成感がある	26	81.2
達成感がない	2	6.3
不 明	4	12.5
合 計	32	100.0

表10 英語力の向上

回答内容	回答数	回答比率 (%)
上達した	5	15.6
部分的に上達した	19	59.4
曖昧、不明	8	25.0
合 計	32	100.0

表 11 英語研修の内容評価（複数回答）

回答内容		回答数	回答比率（％）	回答人数比率（％）
よかった	a. 実用性	6	14.3	18.8
	b. 楽しく学ぶ	9	21.4	28.1
	（小 計）	（15）	（35.7）	（46.9）
問題があった	a. 退 屈	8	19.0	25.0
	b. 他国の人との交流がない	3	7.2	9.4
	c. クラスの人数が多い	5	11.9	15.6
	d. 日本語の使用	9	21.4	28.1
	（小 計）	（25）	（59.5）	（78.1）
その他		2	4.8	6.3
合 計		42	100.0	131.3

の日本における学習環境にはなかった「英語漬け」になること、それによって飛躍的に英語力が向上することを期待していたと言える。今回の参加学生 34 名は、17 名ずつ、二つのクラスに分かれて研修を受けた。日本人学生ばかりのクラスである。教師は経験豊富で熱心なオーストラリア人であり、彼らは教室内で日本語を話すことはなく、英語による英語教育を行うことを旨としている。にもかかわらず学生たちからこのような問題が指摘されるのは、教わる学生たち自身が、よくないとは知りながら仲間内のコミュニケーションでつい日本語を使ってしまうということを意味している。閉鎖空間の中で自由に英語を操れるのは教師ただ一人、他の 17 名は日本語を共通語としており、日本語でコミュニケーションを行うことが習慣化している。日本人同士が日本語を排除し、おぼつかない英語のみで会話を保とうとすることは不自然であり、よほどの強い決意と信念にでも基づかなければできることではない。いきおい、教室内での英語のやり取りは教師対学生の二者関係に限定されがちになる。したがって、17 名という、日本の中学、高校、大学における語学教育環境に比すれば理想的な少人数クラスに対してさえ、「クラスの数が多い」との不満が出てきてしまうのである。

「他国の人との交流がない」という指摘も同種の問題である。同じクラスの学生たちが、日本人に偏ることなくさまざまな国の出身者の集団になれば、英語が全体の共通語になる。不自由ながらも互いに英語でコミュニケーションを取り合い、新しい友人が出来、英語の練習にもなる。タスマニア大学での英語研修の最大の問題点は、学生たちの期待するこうした多国籍多文化環境が英語研修クラスにおいて実現できていないことである。34 名の

参加者のうち8名が「退屈」を感じたのもまた無視できない結果である。学生たちの多くが初歩の英会話にも自信がないとしても、一定程度の実力差はある。が、現状ではより出来る者が上のクラスにチャレンジする機会はないし、クラスの中で外国人同士、切磋琢磨するチャンスもないのである。

参加学生たちがクラスで学んだ英語を試し、研修の第二の目的である異文化交流を行う機会はクラス外の活動、主にホームスティに求められる。

ホームスティ体験に対する回答者32名の評価は、概ね肯定的である。72%が何らかの意味で「よかった」と言っており、特に、事前にはかなり不安感の強かった「人間関係」に関する評価が目立つ。(表12) また、自分のホームスティ以外の人達との交流の広がりについても、「大学で知り合った人」以外では、「友達のホストファミリー」あるいは「ホストファミリーの友達」という、ホームスティ先を軸とした交流が圧倒的比率を占めている。(表13) 多くの学生がその可能性に魅力を感じていたホームスティは、実際、学生たちの期待を裏切らないものであったと言えるだろう。

タスマニア州に1ヶ月余滞在した学生たちの60%は、オーストラリア人の人柄について、「親切で親しみやすい」との好印象を抱いて帰国した。他にオーストラリア人のもつ「おおらかさ」や「ゆとり」、「異文化や異民族に対する許容度の高さ」をあげている。(表

表12 ホームスティの評価(複数回答)

回答内容		回答数	回答比率(%)	回答人数比率(%)
よかった	a. 人間関係	13	33.2	40.6
	b. 異文化体験	4	10.3	12.5
	c. 語学練習機会	1	2.6	3.1
	d. その他	5	12.8	15.7
	(小 計)	(23)	(64.9)	(71.9)
問題があった	a. コミュニケーション	4	10.3	12.5
	b. 食生活	3	7.7	9.4
	c. 休日の過ごし方	2	5.1	6.3
	d. その他	4	10.3	12.5
	(小 計)	(13)	(33.4)	(40.7)
特になし		3	7.7	9.4
合 計		39	100.0	122.0

表 13 ホームステイの家族以外の交流関係（複数回答）

回答内容		回答数	回答比率（％）	回答人数比率（％）
できた	a. 友達のホストファミリー	9	20.9	28.1
	b. ホストファミリーの友達	10	23.3	31.3
	c. 大学の人	11	25.6	34.4
	d. 日本人	8	18.6	25.0
	e. その他	1	2.3	3.1
	（小 計）	(39)	(90.7)	(121.9)
できなかった		3	7.0	9.4
不 明		1	2.3	3.1

表 14 オーストラリアという国や人々の印象（複数回答）

回答内容	回答数	回答比率（％）	回答人数比率（％）
オーストラリア人は親切、親しみやすい	19	48.7	59.4
おおらかでゆったりとした国	7	17.9	21.9
異文化、異民族の混住、許容度が高い	7	17.9	21.9
自然環境がいい	2	5.1	6.2
その他	4	10.4	12.5
合 計	39	100.0	121.9

14) 最後に、参加学生の圧倒的多数がこの語学研修プログラムを友人や後輩に勧める、と回答していることに注目したい。（表 15）

4. 海外英語研修プログラムの今後

第2回タスマニア大学語学研修は、上記のアンケート集計結果に見られる通り、参加学生たちの期待に応え成果をあげたと言える。

タスマニア州は豊かな自然環境を誇り、州都ホバート市も人口 16 万人のこじんまりとした街で、学生生活を送る上で安全性が高く、健全な環境が保証されている。海外経験の乏しい若い学生の送りだし先としては申し分ない環境である。

タスマニア大学は、春休みを利用した日本人学生の語学研修を、本学の他に 5 つの大学から受け入れている。これら全体を統括するプログラム主任として、日本での生活経験と十分な日本語力を有するコーディネーターがおり、派遣元大学との交渉を担当、学生達の

表 15 友人や後輩にこの語学研修へ参加を勧めるか（複数回答）

回答内容	回答数	回答比率（％）	回答人数比率（％）
勧める			
a. 友人がしやすい	3	7.0	9.4
b. 異文化体験	15	34.9	46.9
c. 楽しい	3	7.0	9.4
d. 英語力が付く	8	18.6	25.0
e. お得	1	2.3	3.1
f. 自分の成長	5	11.7	15.6
g. ホームスティがいい	1	2.3	3.1
h. その他	3	7.0	9.4
（小 計）	(39)	(90.8)	(121.9)
勧めない			
a. 英語力が何かない	1	2.3	3.1
b. ホームスティがよくない	1	2.3	3.1
c. 団体研修の意義に疑問	1	2.3	3.1
（小 計）	(3)	(6.9)	(9.3)
不 明	1	2.3	3.1
合 計	43	100.0	134.3

到着時には、日本語と英語によるオリエンテーションを行い、各グループに一名ずつ配属されているグループ・アドバイザーを監督し、さらに学生個々人の悩みや相談に、日本語でも応じることができる。

空港への送迎には、コーディネーターとグループ・アドバイザーが当たり、到着後直ちに一行を大学へ案内し、迎えに来たホームスティ家族に学生を引き合わせる。学生達は最初の週末をホームスティ家族と過ごし、月曜日より語学研修が始まる。

グループ・アドバイザーには、外国語の習得や異文化接触経験の豊かな学生や社会人がパート・タイムで雇われており、彼らは、研修開始期にキャンパス・ツアー、市内ツアーを行い、学生生活に必要な施設への案内、および食事や買い物の仕方まで指導してくれる。また、学生達が十分に自立できるまで毎日、教室への案内、昼食の付き添いまでです。彼らはコーディネーターより携帯電話を渡されており、常に連絡が取れるように配慮されている。

学生のホームスティ配置に関しては、専任の担当者が1名おり、年間を通じて一定の基準に基づいてホームスティ先をリクルートし、個々の学生の条件に出来る限り合った家族

を選択し、ホームスティ家族と学生双方の疑問や苦情に対応する。

英語教育を担当する教員は、経験豊かな専任教員であり、臨時雇いの教員を使ってその場を凌ぐようなことはしていない。コーディネーターの所属する国際交流部と英語教育センターは同じ建物の中にあり、両部門のコミュニケーションは円滑に行われている。

一般に、オーストラリアの大学の国際教育への取り組み姿勢は、大学にとって大切な授業料収入をもたらす留学生や研修生に対し、必要十分な教育とケアを保証する、というものであり、タスマニア大学の場合もその例外ではない。

この研修に引率教官として同行し以上の観察結果を得た筆者は、このプログラムを、本学の学部一年生を中心とする学生達の研修先としてふさわしいものと判断した。さらに、タスマニア大学の万全の受け入れ態勢に鑑み、ミシガン州立大学での研修当時より2名の本学教官が学生達を引率していた制度を改め、本年度より学生のみで派遣することを本学留学生委員会に提起し了承された。

今後、研修プログラム内容の改善やスケジュール調整等に関するタスマニア大学側との交渉、学内でのプログラム説明会の実施と個別相談への対応、参加学生の事前オリエンテーション、プログラム期間中の先方とのコミュニケーション、プログラム評価報告等は留学生センターが担当していくことになるだろう。

実用性のある英語の習得と異文化体験に対する学生達の関心と需要は今後とも増加しこそすれ減少することはないと思われる。また、現在は、学部一年生を中心とした初級の語学プログラムのみであるが、今後は、それ以上の語学力を有し文化研修や専門基礎等への関心をもつ学生たちのための多様なプログラムの開発も必要となろう。留学生センターとしてはとりあえず出来る限り早期に、夏休み期間中にも本学学生たちを派遣できる質の良い英語研修プログラムを今ひとつ他地域に開発したい。将来的には、英語に限らず中国語等による海外研修プログラムの開発も考えられる。留学生センターが、学生たちに海外経験の機会をより多く多角的に提供できるようになることが望ましいと考える。